

要 約

トリクロサンの魚類に対する長期的影響を評価するため、ヒメダカ (*Oryzias latipes*)を用いて初期生活段階毒性試験を実施した。

試験は、1試験区当たり60個体の受精卵を用い、5濃度区[0.500、0.250、0.125、0.0625及び0.0313 mg/L(公比2.0)]、助剤対照区及び対照区(各試験区当たり4連)、水温 $24\pm 1^{\circ}\text{C}$ 、38日間(ふ化後29日間)試験液を連続的に供給する流水式で暴露を行った。この間、卵のふ化数及びふ化日数、発生異常数、ふ化後の生存数、毒性症状、生存した稚魚の体重及び体長について観察または測定を行った。これらは被験物質の影響を判断するための影響指標とした。また、試験液中の被験物質濃度及び水質についても測定した。

その結果、測定した試験液中の被験物質濃度は設定濃度の84.8～103%の範囲にあり、設定濃度の $\pm 20\%$ 以内に維持されていた。従って以下の試験結果は設定濃度に基づいて算出した。

トリクロサンはヒメダカに対し、胚期では0.250及び0.500 mg/L区で全個体が死亡に至る作用を及ぼした。また、0.125 mg/L区でふ化日数に関して、対照群と比較し統計学的に有意な影響を及ぼした。仔稚魚期では0.125 mg/L区以上で生存率、成長(体長及び体重)に関して有意な影響を及ぼし、0.0625 mg/L区以上で毒性症状が顕著に認められた。

これらの結果から、本試験におけるトリクロサンのヒメダカに対するLOEC(最小影響濃度)は0.0625 mg/L、NOEC(最大無影響濃度)は0.0313 mg/Lとした。